



新年のご挨拶 —1992年—

森 田 善 一 郎*

会員の皆様、新春おめでとうございます。

皆様それぞれにいろいろな感慨をもって新しい年をお迎えになられたことと思います。

一昨 1990 年に引き続き昨 1991 年も激動の年でありました。国外ではイラクのクウェート侵攻に端を発した湾岸戦争の勃発と終息、ソ連共産党の解体とソ連邦の崩壊、ユーゴスラヴィア内戦など世界が大きく揺れ動き、また国内では証券業界の不祥事とバブル経済の崩壊、海部内閣から宮沢内閣への政権交替など政治、経済ともにいろいろな局面がありましたが、その中で粗鋼生産量が一昨年よりはやや減少したとはいえ 1 億 t を超す水準を保つことができましたことは、まことに喜ばしいことでありました。しかしながら昨今の国内外の政治的、経済的環境の変化の中で、この活況がいつまで続くかという点では見通しが不透明であり、このような背景の中で、我が国鉄鋼産業の活性をいかにして持続させるかが今年の鉄鋼界に課せられた最大の課題でありましょう。皆様ともども今後直面するであろう困難を克服していかなばならないと存じます。

さて日本鉄鋼協会では昨年も活発な活動を展開してまいりました。まず本会の主要行事の一つで会員研鑽の場である春秋の講演大会では、海外からの参加者を含めて、鉄鋼の基礎から応用、さらに萌芽境界領域にわたる 1675 件の新しい研究成果が発表され、大きな成果を挙げました。また本会の機関誌である「鉄と鋼」ならびに「ISIJ International」の刊行も順調に行われ、とくに「鉄と鋼」は新たな編集方針のもとに内容も充実し、両誌とも国内外から高い評価を得ております。一方、共同研究会、特定基礎研究会、鉄鋼基礎共同研究会でも、従来どおり活発な研究活動が行われ、我が国の鉄鋼産業ならびにそれを支える学術の発展に大きく貢献いたしました。

本会活動の一つの柱である国際交流につきましては、昨年 6 月「国際ステンレス鋼会議」を幕張において開催いたしました。国内外から 436 人の参加者を得て、4 日間の会期中に 165 件の学術研究発表と討論が熱心かつ円滑に行われ、大きな成果を挙げました。本年度は、6 月に「第 4 回溶融スラグに関する国際会議」を仙台で、9 月には「第 5 回日本・ノルディック諸国シンポジウム」をフィンランドで、また 11 月には「第 6 回日本・中国鉄鋼学術会議」を幕張においてそれぞれ開催することになっております。一方 ISO 事務局業務も順調に推移いたしております。

私は、一昨年春本会会長就任に際し、21 世紀に向けての我が国鉄鋼産業界にとって「優秀な人材の確保」が最も重要な課題であることを強調いたしました。本協会では将来の鉄鋼科学技術を展望し、鉄鋼研究者、技術者の教育と育成活動の必要性の認識にたち、昨年、新たに「育成委員会」を発足させました。すでに委員会、企画小委員会は活動を始め、大学生の鉄鋼離れ問題、鉄鋼技術者の能力開発問題、産学連携問題などに積極的に取り組んでおります。

* 本会会長 大阪大学工学部教授

さて我が国の学術を支え、社会に役立つ人材を育成する使命を有する最高学府としての大学が、国の文教予算不足のため今憂うべき危機に直面しており、私自身大学に身をおく一人として、これまで機会あるごとにその実情を訴えてまいりました¹⁾²⁾。本協会において八木前会長時代以来検討を進めてまいりました大学における鉄鋼基礎ならびに応用研究支援のための「鉄鋼研究振興資金」の募金も、鉄鋼企業各社のご理解とご協力により実現のはこびとなり、募金額も5億4千350万円に達し、本平成4年度から、この資金による大学の研究助成事業を開始することになりました。ここに本事業にご協力いただきました関係企業各社に深甚の謝意を表しますとともに、会員の皆様にもご期待いただきたいと存じます。

本協会では昨年協会事業特別検討委員会を開催し、本会活動の基礎となる会誌と会費につき検討致しました。会誌「鉄と鋼」は当面技術記事の強化をはかり、論文誌と会報の分冊については時期をみて改めて検討することとし、また個人会費については当面值上げは行わないことと致しました。また講演大会参加費の徴取も行わず、これに替えて講演論文集「材料とプロセス」の価額を改訂させていただくことになりました。会員の皆様にはご負担増になりますが、ご理解ご協力のほどお願い申しあげる次第であります。また鉄鋼の周辺技術領域への取組みについては更に検討を継続しているところでありますが、平成4年度中にはこの懸案事項にも結着がつけられ、新しい枠組みができることと思えます。昨年6月に出された鉄鋼技術情報センター運営委員会報告書に示された情報センターの改革計画は、平成4年度中にすべて実施される見込みであり、会員のニーズに十分応えられる運営が可能となります。平成4年度の協会活動全般につきましては、鉄鋼産業が今後も揺るぎない発展を推持していくのに必要な基礎研究と応用技術のさらなる進展をはかるために、より充実した諸事業が遂行できるよう努力する所存であります。

以上、年頭にあたり、昨年1年間の協会活動の中での特記事項を回顧するとともに、所見の一端を述べさせていただきます。

最後になりましたが、新しい年が会員の皆様方ならびに日本鉄鋼協会にとって意義のある、より良い年でありますようお願い申し上げますとともに、日本鉄鋼産業ならびにそれを支える学術のさらなる発展のため、会員の皆様のいっそうのご努力とご協力をお願いし、新年のご挨拶といたします。

文 献

- 1) 森田善一郎: 鉄と鋼, 76 (1990) 6, p. i
- 2) 森田善一郎: 鉄鋼界, 41 (1991) 3, p. 48